

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：13904

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770190

研究課題名(和文)外国語としての英語語彙学習力の発達と指導の効果

研究課題名(英文)Development of Japanese learners' English vocabulary learning ability

研究代表者

笹尾 洋介(Sasao, Yosuke)

豊橋技術科学大学・工学部・准教授

研究者番号：80646860

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、より効果的な英語語彙学習・指導の開発を目指して、日本人英語学習者の英語語彙学習力の調査を行った。具体的には、(1)日本人英語学習者向けに、語彙サイズテスト、英語接辞テスト、および文脈からの推測テストを開発し、(2)それぞれの知識・能力の関係性について明らかにし、(3)その発達を調査した。その結果、語彙サイズ、接辞知識、および文脈からの推測能力には、有意な正の関係が認められることが明らかとなった。さらに、本研究で作成した診断フィードバックや自主学习用教材により、学習効果が高まる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the research was to investigate Japanese learners' knowledge of English affixes and guessing skill of unknown words from context, which are believed to be major parts of vocabulary learning ability. More specifically, three vocabulary tests (vocabulary size test, word part test, and guessing from context test) were created for Japanese students. Using these tests, the research examined the interrelationships among these three types of knowledge/skill and investigated their development. The results showed that the three types of knowledge/skill were significantly positively interrelated to one another. The results also indicated that the diagnostic feedback and the self-learning materials created for the present research might be effective in promoting the knowledge of word parts and the skill of guessing from context.

研究分野：応用言語学

キーワード：語彙習得 英語接辞 文脈からの推測 言語測定 語彙サイズ

## 1. 研究開始当初の背景

これまで多くの研究結果が、英語語彙知識が英語運用能力の育成に重要な役割を果たすということを示してきた。しかしながら、実際の授業時間内においては、語彙指導に割くことのできる時間が限られているため、多くの場合、語彙学習を学習者個人に任せているのが現状である。そうした現状において、効果的な語彙学習を支援するために、様々な英語語彙テストが開発・利用されてきた。多くのテストは、広さ(どれほど多くの単語を知っているか)や深さ(どれほどよく単語を知っているか)に焦点を当てたものであり、これにより、特定の時点での学習者の語彙知識が明らかになり、それをもとに、学習目標を明確化できるという利点を持っている。しかしながら、より効果的に語彙学習を行うためには具体的にどうすればよいかという点については、教育的に有用な情報をほとんど提供することができない。

そこで、効果的な語彙学習を助ける知識や技能を明らかにし、それらを指導することにより、効果的な語彙学習につながることを期待できる。本研究では、そうした知識・技能を測定するテストを開発し、学習者の語彙学習における弱点を診断し、フィードバックを提供することにより、効果的な語彙指導を支援することを目指す。また、さらに学習効果を高めるために、自主学習教材を作成し、その効果を検証する。

## 2. 研究の目的

本研究では、語彙学習を容易にする知識や技能を語彙学習力(Vocabulary Learning Ability: VLA)とし、VLAの様々な構成要素のうち、もっとも重要であると考えられる、文脈から知らない単語の意味を推測する能力と英語接辞知識に焦点を当てて研究を行った。具体的な研究目的は以下の3点である。

### (1) テスト作成

Sasao (2013)で開発・妥当性の検証が行われた二つのテスト(WPT: Word Part TestおよびGCT: Guessing from Context Test)を日本人英語学習者が受験しやすいように修正を施す。

なお、WPTは、形式、意味、使用の三つのセクションから成り、各セクションは28~54問で構成されている。GCTは、品詞、手がかり、意味の三つのセクションから成っており、各セクションに20問が用意されている。WPTとGCTはそれぞれ、Sasao (2013)の項目難度のデータを基にして、等価な二つのバージョンが利用可能である。

### (2) VLAと語彙知識との関係の調査

英語語彙知識の量とVLA(英語接辞知識と文脈からの推測能力)との関係を定量的に分析する。

### (3) VLAの発達に関する調査

VLA(英語接辞知識)がどのように発達するかについて縦断的調査を行う。具体的には、テスト受験とその後の診断フィードバック、および自主学習教材の効果について定量的に検証する。

## 3. 研究の方法

### (1) テスト作成

WPTとGCTはすべて英語で記述されているため、本研究が対象とする日本人英語学習者、特に習熟度レベルの低い学習者にとっては解答が困難であることが予想された。そこで、問題指示文および選択肢を日本語に訳したものを用意した。一度に数名ずつを対象にして、この修正版語彙テストの予備調査を行った。また、事後インタビューを通してテスト受験上の問題点(例: 指示文は明確か、紛らわしい選択肢はないか)を発見・修正したうえで、さらに別の数名の被験者に同様の予備調査を行った。

これらに加えて、テスト実施後に提供する診断フィードバックも日本語で作成し、学習者からの意見を基に修正を加えた。

### (2) VLAと語彙知識との関係の調査

語彙知識については、Nation and Beglar (2007)が作成したVocabulary Size Test (VST)の2言語版(日本語で書かれた選択肢から、適切な意味を選ぶ)を使用し、ウェブ上で実施した。

WPTとGCTについては、マークシート方式を採用した紙媒体で実施した。

2015年4月から7月にかけて、169名の大学生を対象として、VST、WPT、GCTを実施した。

### (3) VLAの発達に関する調査

WPTについて、事前・事後テストを実施することにより、接辞知識がどのように発達したかについて調査した。具体的には、計62名の日本人大学生を、実験群(33名)と統制群(29名)に分けた。その上で、実験群には、テスト実施直後に診断フィードバックを与え、さらに英語接辞の意味・使用・用例を一覧にまとめた学習用教材を自主学習させた。統制群は、診断フィードバックのみを提供した。調査は2016年4月から7月の間に行い、事後テストは事前テストから約3か月の間隔をあけて実施した。なお、事後テストは、事前の予告なしに実施された。

#### 4. 研究成果

##### (1) テスト作成

予備調査を経て、日本人英語学習者にとって受験しやすいテストを作成した。WPTとGCTにおいて使用されている「品詞」や「接辞」という用語に馴染みのない学習者が多く見られたため、例や簡単な説明を加えるなどして理解しやすいよう工夫した。

診断フィードバックについては、学習者の弱点が一目でわかるように、三つのセクションの各正答率をレーダーチャートにて提示するようにした。

##### (2) VLAと語彙知識との関係の調査

語彙サイズ、接辞知識、および文脈からの推測能力には、有意な正の関係が認められた。つまり、VLAの高い学習者は、語彙サイズも大きい傾向にあることが分かった。

VSTとWPTの関係を詳細にみると、WPTの意味、語形、使用セクションの順に、VSTの得点と強い関係があった。VSTは、語の意味知識を問う形式であるので、使用セクションよりも意味セクションの方に、強い関係が認められたのは予想通りであった。注目すべき点は、語形セクション(英語接辞として存在する綴りを選択する)も語彙サイズと重要な関係があるということである。接辞知識には、語の中に含まれる接辞(および語根)を認識できることも含まれるという先行研究を裏付ける結果となった。接辞学習においては、その語形にも注意を向ける重要性が示唆された。

VSTとGCTの関係を詳細にみると、GCTの意味、手がかり、品詞セクションの順に、VSTの得点と強い関係があった。上述のように、VSTは語の意味にかかわるテストであるので、このような結果が得られたものと推察される。このように、接辞知識と文脈からの推測能力はともに語彙サイズと正の関係があることが示された。

##### (3) VLAの発達に関する調査

統制群・実験群ともに、得点が有意に向上した。自習教材を配布しなかった統制群についても、実験群ほどの差異は検出されなかったものの、有意な成績の向上が認められた。つまり、WPTを受験し、診断フィードバックを受け取ることによって、当該知識が向上した。これは、テストを受験することにより、接辞学習の重要性を意識するようになり、また、接辞知識には、形式、意味、使用の三つの側面が含まれていることへの気づきを促したためだと考えられる。さらに、実験群は、これらの気づきに加えて、自習教材を通して、具体的な接辞の意味、使用、用例を学ぶことができるので、さらに学習効果が高まったと考えられる。

本研究で開発した日本人向けのWPTとGCT、およびその診断フィードバックは、下記のホームページ上で順次公開していく予定であ

る。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計4件)

Webb, S., Sasao, Y., & Ballance, O. (to appear). The updated Vocabulary Levels Test: Developing and validating two new forms of the VLT. *ITL - International Journal of Applied Linguistics*, 168(1).

Sasao, Y., & Webb, S. (2017). The word part levels test. *Language Teaching Research*, 21(1), 12-30. doi: 10.1177/1362168815586083

川口享洋, 笹尾洋介, 河合和久.(2015). 「英語語彙力診断のためのコンピュータ適応型テスト作成支援システムの構築・評価」. 日本 e-Learning 学会 第 18 回学術講演会論文集, 48-55.

小林誠・笹尾洋介・河合和久(2015). 「携帯情報端末を用いた英語語彙学習アプリの開発と効果検証」. 日本 e-Learning 学会 第 18 回学術講演会論文集, 36-43.

##### [学会発表](計3件)

笹尾洋介・河合和久.(2016). 「携帯情報端末を用いた工学英語語彙学習アプリの効果検証」. 外国語教育メディア学会(LET)第56回全国研究大会(早稲田大学).

小林誠・笹尾洋介・河合和久.(2015). 「携帯情報端末用工学英語語彙学習アプリの開発」. 外国語教育メディア学会(LET)第55回全国研究大会(千里ライフサイエンスセンター).

笹尾洋介.(2014). 「語彙学習力テストの開発」. The Fourth Joint Conference on English Vocabulary and Lexicography(麗澤大学).

##### [図書](計0件)

##### [産業財産権]

##### 出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

##### 取得状況(計0件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://ysasaojp.info/testen.html>

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

笹尾 洋介 (SASAO, Yosuke)  
豊橋技術科学大学・工学部・准教授  
研究者番号：80646860